



地域と防災 大学と

広島工大

どう避難 被災地と模索

4月中旬の広島工業大（広島市佐伯区）の一室。1999年の「6・29豪雨災害」で大きな被害が出た河内地区（同区）の住民や学生が防災をテーマに集まった。現実問題として避難しない人は多い。若者の視点で解決の糸口を見いだせないだろうか。地区の自主防災会連合会の藤田忠延会長（69）が神妙な面持ちで学生に問いかけた。

被災を機に地域ぐるみで防災活動に取り組む河内地区。2021年夏の豪雨でも土砂災害が発生した。会合の場で学生が披露したのが、一部の地区の地形を再現した立体模型（縦30センチ、横45センチ）。模型に危険箇所を色分けして投影する「3Dマップ」として活用でき、視覚的に危険度をより実感できるよう工夫した。

さらに地区内で土石流が発生した場合の経路をシミュレーションした動画も紹介。藤田会長は「臨場感がある。住民の危機感も高まり、早めの避難につながるはずだ。若い学生との活動は地域の刺激にもなる」と話し、地域で活用する考えを示した。

防災に関心がある学生が数カ月かけて仕上げた。4年齋藤正広さん（22）は「自宅近くの八木地区（安佐南区）で起きた広島土砂災害を目の当たりにし、災害を身近に感じた。被災の取り組みを続けてほしい」と力を込めた。

若者視点で解決の糸口見いだせないか

全国的に多発する災害を踏まえ、広島市内の大学が地域とつながる防災活動に力を入れている。大学は社会のニーズを捉え、実践力を身に付ける教育の場として学生の背中を押し、学生も専門性や柔軟な発想を生かした活動で存在感を示している。住民たちも地域の防災力を高める学生たちに期待している。（浜村満大）